



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(六) 洋行

関信三となつて

明治五年九月十四日の夜、月明かりに乗じて、数人の男たちが横浜港の大棧橋に停泊していた一隻の蒸気船に乗り込んだ。フランス船籍ゴタペリー号。船は夜明けとともに錨を上げ、大洋へとすべりだした。

ひそかに乗船した男たちは東本願寺の洋行団の一行

であった。メンバーは、法嗣（次の法主）現如、随行者として加賀松任本誓寺住職松本白華、金沢永願寺住職二男石川舜台、かつての幕臣成島柳北、そして今や関信三となつた安藤劉太郎である。

安藤劉太郎は、洋行の企てがほぼ固まつた頃に名前を変えている。すなわち、七月十八日、主だった者が集まって洋行の密議が行われたが、その二日前に差し

出した諜者報告書には、すでに「安藤劉太郎」ではなく、「信太郎」と署名している。つづいて「関信太郎」。出発直前の九月十日付の報告書には、彼の最後の名前となった「関信三」と署名している。だから、「関信三」は諜者時代とは無関係の、幼稚園界だけの名前ではない。彼は「太政官諜者関信三」として、キリスト教探索の拠点であった横浜から旅立ったことを覚えておきたい。

この時の洋行は、長い大谷派の歴史にとって（次期）法主が国外に出るといふ画期的な出来事であったが、ほぼ同時期に行われた島地黙雷ら本願寺派の洋行に比べ、精彩を欠くものであったと言わざるを得ない。そもそもこの洋行は、政府要人の要請によるもので、東本願寺自身から出た企てではなかった。北海道開拓を終えたばかりで大きな借財を抱える東本願寺にとっては、むしろ迷惑な話で、洋行が見るべき成果を残さなかつたのも、そこに遠因があつたといえよう。

ところが一方で、キリスト教阻止をめざして最前線で働いてきた人々にとっては、洋行は千載一遇のチャンスであった。彼らはこれをキリスト教阻止のための最後の賭けととらえたのである。彼らは本山には内密に、関信三を英国の神学校に送りこむという驚くべき計画を立てた。大谷派の歴史にとってあまり意味を持たなかつた洋行は、関信三にとって特別な意味を持つことになる。彼自身の洋行記録は発見されていないが、さいわい、洋行の随行者たちの航海中の記録が公開されているので、これらによって関信三の足跡をたどってみたい（註）。

英国へ

荒れる海で船酔いに苦しみながら、九月二十日、彼らは初めての停泊地、香港に到着した。誰にとつても初めて見る異国であった。東本願寺一行も、同行の日本人たちと共に上陸し、菓子を食べ、麵を味わい、散

策を楽しんだ。そしてここで松本白華・石川舜台・関信三の三人は合議の上、ひそかに神学校入学のためのパスポートとでも言うべき、英国教会への紹介状を手した。

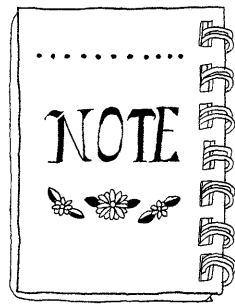
香港で短時日を過ごしたのち、船を乗り換え、サイゴン、シンガポール、ペナン、セイロンを経て、開通したばかりのスエズ運河を通過したのが十月二十二日、そして六日後、一行は無事マルセイユに到着。数日をマルセイユに遊んで、パリに着いたのは十一月一日の未明であった。

関信三は、パリに着くと、すぐにも英国に向かいたいと願ひ出た。故国で待つ同志たちを思えば、パリであたら日を過ごすことはできなかったのだろう。けれども実際に彼が英国に旅立つのは、それからおよそひと月後のことである。言葉が不自由な一行が落ち着くまで、どうしても彼が必要だったからである。

この間に一行は、大使館を通じて「改暦」の知らせ

を受けている。故国において太陽暦が採用され、明治五年十二月三日をもって明治六年一月一日と改定する旨、布告されたのである。太陽暦

は英語では「Christ Year」、つまりキリスト暦のことである。彼らにとつて改暦はキリスト教解禁への一里塚にほかならなかった。松本白華は「我僕之憂更増一層」と書いた。フランス上陸後、彼らの憂いは深くなる一方だった。彼らがパリに到着した未明、いまだ天は黒々としていたのに、パリの街はガス灯に輝いていた。壮大なホテルに驚き、博物館に驚き、王宮に驚き、動物園に驚いた。キリスト教国の力に圧倒される思いであった。そこへ「本国でキリスト暦採用」の報である。彼らの憂いは「更増一層」であった。



明治六年一月八日（以降西曆）、関信三は同行の人々と別れ、香港で手にした紹介状をふところに、ひとり英国に渡った。そして、ロンドンの南西およそ四十マイルほどの、テムズ川南岸に開けたレディングという古都に落ち着く。英国教会伝道会社（C・M・S）が運営する神学校で学ぶためであった。C・M・Sは、関信三が破邪僧猶龍ユウリュウであったころ、長崎で師事していた宣教師エンソールを派遣した組織である。

校長は、かつてセイロンに派遣された宣教師であったから、極東の禁教下でキリスト教信仰を告白したというこの日本人の来訪を、奇跡とまで感じて歓迎したことであろう。異文化圏での生活を体験していた校長は、学校での教授ばかりでなく、関信三が直面している生活習慣の違いに配慮しながら、教会と家庭生活に彼を好意的に迎え入れたはずである。彼もまた、日曜日ごとの礼拝はもちろん、さまざまな教会生活に積極的に加わったことであろう。関信三はレディングにお

いて、英国の日常生活を体験し、日常生活におけるキリスト教の働きや役割などについて観察する機会を得たのである。

しかし、この生活は長く続かなかつた。関信三がレディングに居を定め、生活が落ち着き始めたころ、ついに本国でキリスト教が解禁された。明治六年二月二十四日、キリシタン禁制の高札が静かに下ろされたのである。「改曆」の報は二週間ほどでパリの彼らの耳に届いているから、この報も、おそらく三月中には関信三まで届いたのではないだろうか。すでに十分にその予兆はあったとしても、キリスト教解禁は、関信三にとって決定的な意味を持っていた。彼は、早くも四月には、レディングでの暮らしに自ら終止符を打っている。

この彼のすばやい決断は、彼の「留学」の目的が、キリスト教およびキリスト教国について知りたいという、一般的あるいは学問的関心に根差したものでな

かつたことを、はつきりと示している。大前提が崩れた以上、キリスト教の神学校に学ぶ理由はまったく失われたのである。一見穏やかなレディングでの暮らしは、彼にとつて苦しみ以外のなにもでもなかつた。

学問を続けたいたのであれば、以後もそこに留まることは可能であるばかりか、さまざまな便宜が得られて有益であつたはずである。けれども彼には、偽りの上に築かれた人間関係をこのまま維持し、その中で暮らしていくことは、もはやできなかつたのであろう。彼は一刻も早く、偽りの生活から逃れたかつた。キリスト教の解禁は、大義の喪失という虚脱感はあるながらも、一方では、長崎以来身につけざるを得なかつた、人も自分も偽る生活からまつたく解放されることでもあつた。

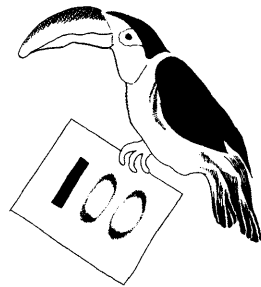
四月、関信三は、レディングを去り、ロンドンの中心部から南東におよそ一マイルほど下つたブロッケレーという小さな村落に転居した。そのあたりは鉄道

が通るまでは閑散とした農村地帯で、目立つ建物といへば、追いはぎの巣とうわさされる宿屋がひとつあるばかりであつたという。産業革命

のはてにロンドン市内の住環境は著しく悪化し、富裕層からロンドンを脱出していた。一八四〇年以降、運賃の安い鉄道が普及したことによって、近郊にいわゆるベッド・タウンが形成されるようになる。ブロッケレーもそうして住宅地となつた地域のひとつだつた。

関信三が移り住んだ一八七〇年代初めは、新興住宅地が増殖する緒についたところ、と言つてよいだろう。

キリスト教解禁の事実を知り、神学校を去つても、彼は東本願寺一行のもとに帰ろうとしなかつた。彼は、ひとりになれる時間と空間が必要だつた。彼がど



のような経緯でこの地を選んだのか不明であるが、そこには、がむしやらに何かを調べたり学んだりすることを動機づけるものは見あたらぬ。むしろそこは、彼にとつて隠遁所のようなものであつたらう。殺風景ではあるがのどかな新興住宅地で、束縛のない生活をしながら、彼は、キリスト教阻止に命をかけてきた自分という存在について考え続けたであらう。そして、今こうしてひっそりと暮らしている英国というキリスト教国の實際に、ようやく目を向け始めていったのではないかと思われる。

しかし、プロツケレーにおける関信三の生活は、決して安閑としたものではなかつた。洋行の本隊、松本白華から、気になる報告を受けていたのである。

現如との確執

関信三が英国に旅立つ前から、現如の行状は、しだいに傍目にもかんばしくなく写り始めていた。東本願

寺一行の洋行は、先行きの見通しが不透明であつた。キリスト教が解禁され、かりそめの目的すら失われた。現如を（パリから離して）留学させてはどうかという外からの勧めもあつたが、資金が不足し、パリで借金をしている状況であつた。そこで、白華が現如の随行としてヨーロッパに残り、石川・成島の二人はイギリスに立ち寄つた後、アメリカまわりで帰国することに決められた。現如と白華は、長く滞在したパリを引き揚げ、ベルギー、ドイツに向かうことになつた。石川と成島は明後日、現如と白華はいよいよ明日パリを發つ、という日の夜のことである。

四月二十四日、「夜十時小野・石川来、藤原不在悄然婦」。この夜、白華らは現如をいさめるつもりだつたようである。しかし、現如は戻らず、小野・石川は悄然と帰るほかはなかつた。二十一歳の青年現如としては、パリ最後の夜に、わざわざ説教されるために帰りたくない、というところであつたらう。ふたりが

帰った後、白華は珍しく日記に思いの丈をぶちまけた。「余徒百万保護して善二導んとするに聴きたまはず（中略）嗚呼これ何事そや。余断腸の苦迫れり」。

このような出発である。彼らの旅は困難なことが多かった。資金的にも厳しくなり、白華は現如に代わって、全権大使あてに借金願いの手紙を書いたり、他にも借金を依頼している。

五月十二日、フランクフルトでの日記。「藤公無情使人愁殺」。何があつたのか。翌十三日、白華は借金のためにふたりの人物を訪ねた。彼らは白華に帰国を勧めた。現如もこれに同意し、帰国することが決まつた。

帰国することに決めてふたりはパリに戻った。そこで決定的な破局が訪れる。十七日「藤公親奪會計權、余返納之。藤公貽余及関生金二三五〇F、更貽一紙放逐書。余急報之竜動在留之石川・関・成島」。石川・成島が帰国に決まつてから、成島に代わって白華が会

計係になつていた。この日、現如は白華の會計權を取り上げ、白華も、それを返上したのである。會計を握つた現如は、白華と関信三に二三五〇フランと、さらに「放逐書」を渡したという。随行者としての任が解かれたのである。白華はロンドンの石川・関・成島に急報した。

二十一日、知らせを受け驚いた関信三が、急ぎパリにやつて来た。石川らは二十日にすでに帰国の途についたという。白華と関はお互いの事情を語り合つた。白華にしてみれば、もう関信三しか心情を打ち明けられる者はなかつた。憤りと、財政のひつ迫。しかしその日、現如は、もう一度會計をやってくれるよう白華に頼んだのである。

翌二十二日、関信三は白華に同行し、弁務使館を訪れた。一度戻つて、今度は現如に同行し、関は再び弁務使館を訪れた。借金を頼みに行ったのである。

二十三日、現如は白華にこれまでのことを謝罪。弁

務使館から借金の件が応諾され、白華と関信三が受け取りのため弁務使館その他に出向いた。一応落ち着いたかに見えたこの日の夕刻のことであろうか、現如は白華に、お前の宿料は高いから払えないと申し渡した。随行役を罷免された時に、二十五日までの宿料を現如が払うことになっていたらしい。白華は、二十三日までの宿料を出していただければ幸甚ですと答えた。彼は、その日のうちにパリを離れることを決意する。

翌二十四日早朝、白華は関信三と共にロンドンに出発した。そして数日をロンドンに過ごしたのち、二十八日に、ひとりパリに戻る。六月四日、白華は現如に同道して帰国の途についた。

キリスト教解禁後プロツケレーに移ってから、関信三が最も心を悩ませたのは、キリスト教の問題でも、異文化の問題でもなく、彼が属し、そのために働いて

きた集団の問題であった、ということは彼にとって大きな意味を持っている。

彼が課者という没個性の黒子として生きることを自らに課したのは、幕末以来、彼が、本山、すなわち法主に対して、ロイヤリティーを保ち続けていたからにほかならない。真宗における法主と一般僧侶との関係は、幕藩体制における武士の、藩主に対する忠に近いものがある。しかし、宗教集団として鎌倉以来の歴史を持つ真宗教団は、宗祖親鸞の法灯を「血脈」、すなわち血縁関係によって伝承することによって、他の仏教集団とは異なる教団形成をとげてきた。その意味では、法主の絶対性は、時に他家から養子を迎えることも辞さなかつた幕藩体制以上のものである。「血脈」と「信仰」が結びついているという点では、天皇制により近いのではないか。

法主の絶対性は、疑いのない、自明なものとして、自己の存在の大前提として存在する。法主に対する口

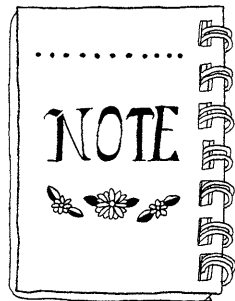
イヤリテイーはその絶対性に基盤を置いている。管見ながら、親鸞の思想の中にその萌芽があつたとは思えない。むしろ人間一般に、ある種のことを絶対化し、神格化したいという欲求が存在しているのであろう。しかし、そのような人間の欲求を、親鸞以降の教団形成において有効に利用してきたのも、また事実である。

関信三は、真宗内部での学問ばかりでなく外においても学問をし、外の人間との交流も体験し、また比較的中央に近いところにいたことから情報も入りやすく、法主に対して全く無批判な絶対視をしていたとは思われない。むしろ彼は批判精神をもって、本山中枢を見ていたはずである。英国での神学校行きが、基本的には本山に内密で行われたことも、そこに理由の多くはあるかもしれない。しかし、法主は真宗大谷派を形成する巨大経済組織のヒエラルヒーの頂点に立つものであり、彼自身の人生もその中にしっかりと組み込

まれていた。法主の絶対性を否定することは、自らを組織の外に置くことを意味した。仏教滅亡という危機感の中で護法のために働くこと

は、彼にとって、ひびが入りつつあつたロイヤリテイーの依つて立つ基盤を自ら補強する作業であつたとも言えるだろう。しかし今、故国を遠く離れた新しい秩序の中で、彼は故国でのキリスト教解禁を知り、また人間現如と出会つたのである。

六月八日、現如と白華とがすつたもんだのあげく帰国したのちも、関信三はひとり英国に残つた。関信三には長く虚脱感が残つた、と思う。キリスト教が解禁され、諜者としての存在理由が失われても、それは彼にとって完全な基盤の喪失ではなかつた。なぜなら彼



が破邪僧となり、謀者となったのは、宗門を護るためであり、護るべき宗門が存在している限り、彼の存在理由は失われるはずのものではなかったからである。故国では依然として仏教が厳しい立場に置かれていることに変わりはなかった。しかし、宗門に対する信が失われたとき、彼は立つべきところと進むべき道を失った。ここにおいて、彼は心情的に真宗を離れた、と考えられるのではないだろうか。

八月、関信三はプロツケレーを去り、ロンドンに戻った。彼がロンドンに移ったのは、帰国を念頭に入れたことであろう。彼が最後に白華を通して渡されたのは、一三三〇フラン。辛うじて日本までの船賃に足りる額である。現如は、関信三のこれ以上の留学を、望んでも認めてもいなかった。日本から援助があったか、現地で借金をしなければ、経済的余裕はまったくなかった。彼はそれからおよそ三か月ロンドンにとどまっているから、何らかの方途を得たもの

か。その間の記録は皆無である。経済状況からみれば、学校に入ったり、個人的に教師について学んだりした可能性はほとんど考えられない。資金が許すぎりぎりまでロンドンに滞在し、十一月、関信三は英国を後にした。

今回は、帰国した関信三が幼稚園に出会うまでを書いてみたい。

註

関信三の洋行中の主な資料としては次のものがある。

松本白華「航海録」〔真宗史料集成〕第十一卷 維新期の真宗
同明舎出版 一九七五

成島柳北「航西日乗」・「柳翁洋行會計録」〔明治文化全集〕
第七卷 外国文化篇 日本評論新社 一九五五